

センター つづし

NO.94



高校生公開授業風景より

目次

ひと言	高橋 正行	1
特集 宮城の教育はどこに向かっているのか ～センターつづし 93号を読んで～		
学力テスト体制の現状 想像し、創造する自由が保障される学校に	鈴木 吉雄 堀籠 拓	2 4
保健室で子どもを支える 教職員評価と賃金 宮城の現状と課題	佐藤 日和	6
学力向上のための宿題をというけれど・・・	笹川 聡	8
親から見えた学校の姿	橋本由美子	10
授業とスタンダード	松田 悦子	11
みんなが幸せになれる教育と社会をつくるために	田中 和子	12
	本田 伊克	13
おすすめBOOK 大田堯・中村桂子 『百歳の遺言 いのちから「教育」を考える』		15
教育時評 今日子ども・学校と「いのちの教育」を考える	数見 隆生	16
子どもと学校 「書きたい。」だから、書く	小野寺由美子	18
3・11から8年	阿部美弥子	20
わたしの出会った先生 25 「どやちゃん。小さな青空」	土屋 聡	21
相談センター報告 第16回 日々の願い	金谷 光子	22
おすすめ映画 「タクシー運転手 約束は海を越えて」	加藤 修二	24
センターの動き		24

ひと言

高校教育を考える

高橋 正行（センター運営委員）

「歴史とは何か、なぜ歴史を学ぶのか」「政治は誰のためにあるのか」「授業を通して世界を語り、社会の問題を問いかける教師たち、教師が語る世界に引き込まれていく生徒たち。」

私は東北の港町で育った。海と山に囲まれた漁業と農業の町である。高校時代に教わった教師たちは若く、情熱的であった。彼らは大学時代社会矛盾にしっかりと向き合った青年たちだったのかもしれない。地学の授業のテキストは岩波新書だった。自然の奥深さを淡々と語る授業は魅力的であった。運動部も文化部も部活動が盛んで、10月、文化祭が近づくと生徒たちは学校に泊まり込んで文化祭の準備に励んだ。

今、高校教育が大きく変えられようとしている。高大接続改革である。一見大学入試制度の改定のように思われるが、本質は高校教育と大学教育の改革である。改革と言えば前向きに聞こえるが経済効率優先の新たな競争原理の導入である。

私の高校時代は昔としても、高校教育が一変されることを許すことはできない。すべての競争を否定しようとは思わない。しかし、教育を大企業や経済界の利潤追求の道具と考えるなら、そこに未来はない。教育は長い人類の歴史が培ってきた叡智なのだから。

特集

宮城の教育は

どこに向かっているのか

～センターつうしん93号を読んで～

学力テスト体制の現状

鈴木吉雄

『2018みやぎ教育のつどい』で行われた鈴木大裕さんの記念講演を聞いた多くの人から「良かったよ。」との感想を聞きました。当日都合で聞くことのできなかつた私は、惜しいことしたなあと思っていたので『センターつうしんNo.93』は、まさに「待っていました!」というところでした。(センターつうしんがあつてよかつた……)

特に私が膝を打つたのは次の2ヶ所です。

教育の格差というのは教育機会の格差ではなく、学習到達度の格差というふう置き換えられたのです。(中略)本

来はどれだけ政府が投資するかというインプットの問題であつたものが教育現場のアウトプットの問題にすり替えられたのです。

全くその通りです。子どもは様々な家庭環境の子がいるのが当たり前で、その子たちが安心して通えるように、行政(政府)はハード面を整備(投資)することが肝要なはずなのに、今は「学力テスト」の結果に大きな関心を示し、それを付度する教育現場が学習到達度(点数)を上げること躍起になっている現状があります。真に恐ろしいのは、それが本来の教育の目的と勘違いされることです。

その結果「〇〇県では」、「〇〇管内では」、「〇〇市(町村)では」、「〇年生では」、「〇組では」ときりが無い泥沼競争に巻き込ま



れていきます。一つの価値基準で競争するようなことになれば、教師や子どもたちが手をつないで《笑顔》という子どもたちの幸せを求めていく本来の教育はできません。それどころか、他の教師や子どもたちをライバルとして見ていることになるのです。しかし、目の前の子どもたちが、テストで高得点を取ること自体が悪いことではありません。私たち教師は、子どもたちに授業が分かると言ってもらうために苦労しているわけですから、その結果の1つの指標でもある点数を上げるためのいわゆる「学力テスト対策」を、職員の合意で否定することは容易ではありません。それどころか、他の教師の共感を得られないこともありません。もちろん、「学力テスト」だけが子どもの学力を示すものと思っている教師は、非常に少ないと思います。しかし、数値化できない「見えない学力」は、共通の指標があるわけでもなく、教師によっても違うことが往々にしてあります。今の多忙な教育現場では、「見えない学力」を論じ合う時間よりも、「学習到達度」の向上について話し合う方が、話しやすく手取り早く先が見えるのです。そうした中では、本来の教育とは何か（この問題は教師が死ぬまで考え続ける問題と思うのですが）を考える機会（余裕）はなく、「学習到達度」を上げることに躍起になってしまっているという問題点に気がし難くなっているのが、今の現場です。

お金も人も増やさない中で課題ばかりが増していく教育現場は、ますます悪化の一途です。日本の教師は子どもの教育に対する使命感が高く、がんばる人が多いので、現状は何とか持ちこたえています。が、いつ崩壊してもおかしくないというのが、私の素直な感覚です。47年教育基本法にあったように、行政は本来の教育条件の整備を第一に役割を果たし、必要な財政を投入してほしいと思いますし、多くの教師がこうした本来の教育の在り方に気付いて声を上げてほしいと思っています。

そして、もう一つは、教職を辞職する理由を書いた手紙の一文です。

自分が教職を去るのではなくて、教師という仕事が自分を去っていったんだ。

平成になった年、教職の道に歩み出した私は、年々多忙が進み、自分の理想とは違う仕事をやらされ、疲弊する中で平成の終わりを迎えようとしています。

私が目や耳にした教育現場の実態には、「学年だよりに単元テストの平均点を書いて知らせる」、「市販のテストに合格点を設け、その点数以下は再テスト」、「校長が学力テストの結果が良かった学年をほめる」、「全国学力テスト対策として過去問題に取り組む」など、『全国学力テスト』が始まる前には考えられなかったことが起きています。また、「漢字検定」、「100マス計算チャンピオン」、「長縄8の字跳び選手権」、「マラソン・ランキング」など、やたらと個人や学級を競わせて、上位の子どもや学級を表彰することも、よく聞かれるようになりました。

こうした問題が厄介なのは、計画した人たちはどれも悪気があってやっているものではないということです。（それゆえに、この風潮に待ったをかけるのは厄介です。）前述したように「点数は低いよりも高い方がいい」ということは、私もそう思います。しかし、競わせれば、必ず下位が出てきます。合格ラインを設



定すれば、必ず不合格が出てきます。こうしたことを教育現場で行う場合には、やはり注意しなければいけないことがあると思うのです。競争には2種類あります。それは、「弱肉強食」か「切磋琢磨」なのかです。両者の違いは、他者に対するリスベクトがあるかどうかの違いだと思います。私たちは、他者と比べて優越感に浸ることを教えるのではなく、他者とつながりながら共に成長していくことを教えていく必要があると思うのです。そういった意味では、結果だけではなくその過程にも大きな意味があると思います。

子どもの教育で最も大事なことは、教育基本法にも書かれているように、「人格の完成」を待つことだと思っています。しかし、この「人格の完成」とは、目に見えるものだけではありません。むしろ目に見えないものの方が大切かもしれません。個々によっては完成の形も違うでしょうから、千差万別の「人格の完成」があるはずですよ。

このように考えてくると、今の教育現場は自分の考える教育から、大きくかけ離れたものになっていることを痛感させられます。まさしく、「教師という仕事が自分を去って」行こうとしているような気がしています。こうした中で、私は目の前の困難に負けそうになって、子どもに声を荒げる日もよくあります。ここに、偉そうなことを書いてきましたが、現実の私は教師としての「人格の完成」が全くできていません。しかし、こんな私でも共に学ぶ仲間が、サークル、組合、研究会などにたくさんいます。同じように悩む仲間もいます。そうした仲間が、私を勇気づけてくれます。そうした仲間と手を組んで「切磋琢磨」しながら、もう少しがき続けていこうかと思っています。

(梶木小)

想像し、創造する

自由が保障される学校に

堀籠 拓

〇はじめに

機会があることに私は、「学力向上」策は、結果として反対に作用する。」ということ述べてきた。その理由は、校内研究が国語と算数にシフトし（一つの学校で国語・算数・国語と計9年間校内研究を行うなど）、多くの若い教師たちが、他教科や領域における基礎・基本を身に付ける機会を失っていることにある。

子ども達の興味・関心は多様だ。それに対応できる柔軟性と様々な学習への多様な誘い方を教師は身に付けなければならぬ。

「マニユアルやスタンダードで子どもは育つか」との問いは、「マニユアルとスタンダードで教師は育つか」という問いと同意である。その問いへの答えとなるか疑問ではあるが、6年生との1年間の図工の学習を振り返ってみたい。

〇図工の学習で大事にしてきたこと

図工の授業づくりにあたり私は二つのことを大切にしている。一つは彫刻家の佐藤忠良氏が子どもに向けた「図工科のめあて」、もう一つは「サイエンスウィンドウ」（独立行政法人科学技術振興機構2013春号）の特集「見



るから描ける描くから見えてくる」の巻頭言である。以下紹介する。

「ずがこうさくのじかんはじょうずにえをかいたりじょうずにものをつくったりすることがめあてではありません。／きみのめでみたことやきみのあたまでかんがえたことをきみのでかいたりつくったりしなさい。／ここをこめてつくっていくあいだにしぜんがどんなにすばらしいかどんなひとになるのがたいせつかということがわかってくるでしょう。これがめあてです。」（佐藤）

「子どもと一緒に絵を描いてみよう。『上手に描けなくてもいいから』と言って。芸術家の中には、あのピカソみたいに似てない絵を描く人がいる。描いてみたら、本当にあのような世界が見えてくるのかもしれない。描くことは、よく見ること、よく想像すること、そして分かること。昔、美術と科学は同じものだったという。今の人も昔の人もなぜ描こうとするのだろうか。それは、きつと今まで見えなかったものを見たいから。子どもも大人も、描き出す力を膨らませよう。／本物を知らなければ、想像で描きたくても描けない。本物と向き合った経験がなければ、イマジネーションの素材を蓄積することはできない。」（サイエンスウィンドウ）

○取り組みの実際

〈1学期〉

- ① 6年生の決意（手に言葉を添えて）
- ② 漢字の結晶（どんな1年にしたいかを漢字1字で）
- ③ 上靴

〈2学期〉

- ① 物語の絵「やまなし」
- ② 修学旅行のまとめ（90×200cmの障子紙への共同制作）

- ③ 木版画「三小太鼓」

〈3学期〉

- ① 鑑賞「希望の船」
（3・11で被災した雄勝小5年生の共同制作）
- ② 12年後のわたし
- ③ 鑑賞「ゲルニカ」

○「ゲルニカ」を鑑賞した

子どもたちの感想

・とても不思議な絵だなと思いました。白黒で描かれたすごく暗い感じの絵だと思いました。
・爆撃によって多くの人が苦しんでいる様子を風景画のように上手くなく、ざん新な表現で伝えている。ピカソの絵は上手いようには見えないが、伝える力がある。

・白黒だけを使っているなぜ色が使わなかったのかふしぎでした。でも白黒だからこそどくどくの絵もあるので白黒にしたのかなと思いました。
・とても独創的でその人の苦しみ悲しみなどの感情が伝わってくる。ピカソは「ヒロシマのうた」と同じようにどんな被害を受けたか、それを他の人に知ってもらいたかったのかも知れない。ピカソの思いが今も残っている。私はこれからもそういう人たちのことを忘れないようにしたい。

○1年間の図工の授業の感想

・この1年でいろいろなものを創ったり絵をかいたりして、



絵にはかいた人の感情や思いが出るんだなと思いました。

・自分の手を描いたり自分の名前をアルファベットで描いたりとかくいろんなことをしました。今まで大きらいだった図工が好きになりました。彫刻刀は正直めんどうくさかったけど楽しかった。

・とても楽しかったです。自分で想像してオリジナルの絵をかいたり、何かを見て絵をかいたりしたのが心に残っています。

・6年生ではさまざまな活動がありました。物を見てそれがかいたり、自分の名前であートしたり、友達との共同作業で作品を完成させたりして、たくさん思い出があります。心に残っているのは修学旅行の思い出を大きな紙にかき表したことです。班のみんなと協力してたくさん色を使ったりきれいな作品ができました。図工の時間はとても楽しかったです。

〇二つの成果物を比較すれば問の答えは見えてくる

楽しかった修学旅行を想起し、創造する自由が保障された造形活動の中で生まれた作品と、スタンダードで示された学習時間に則った成果物とを比較することがそもそもどのようなかという疑問は私自身にもある。しかし、1年間を振り返った子どもたちの感想に楽しかった行事や学習のことはあっても、頑張った宿題やドリルのことが一切ないのは、どこの学校のどの子どもにも共通することなのではないだろうか。

「想像し、創造する自由が保障されてこそ子どもも教員も育つのである。」

(古川第三小)

保健室で子どもを支える

佐藤日和

「相談したいことがある」と久しぶりに来室した彼女は、「リス力が止まらなくて」と。

口にした途端、涙があふれた。手首には数本の傷がついていた。彼女は東日本大震災で被災し、転居後、転校先でいじめに遭い不登校になった。数年間の不登校を経て少しずつ登校できるようになり、今では全く休まない。被災といじめと不登校、すでに重過ぎる荷物を背負っているが、更に彼女自身こだわりが強く、親子関係も良くなかった。受験のストレスと母親の追い詰めるような言葉により、イライラが頂点に達していた。

堰を切ったようにあふれ出た涙から、胸の中のため込んでいた苦しみが理解できた。ただひたすら話を聴いた後、「保健室に話しに来てくれてありがとう」と伝えた。本人の承諾を得、学級担任に伝え、カウンセラーに繋いだ。卒業直前だったが、中学校にSOSを出してくれて本当に良かったと思う。高校にもフォロワーをお願いしなければ……。二人で抱えないで、高校に行っても養護教諭やカウンセラーに相談してね」と彼女に言う」と「はい」と頷いた。

こうして生徒がSOSを出してくれることが嬉しいし、今、担任や他の職員とありのままを共有することも嬉しい。というのは、数年前はそうでなかったからだ。

以前は、学校が重苦しい印象だった。教師が生徒を力で押さえつけて、こんなことにそこまで言う?と怒ってしまっほぼ、

些細なことも厳しく叱責していた。生徒は礼儀正しく落ち着いていたが、学校の中でいつも緊張しているように見えた。「保健室に行く生徒は弱い子」「甘い」「我がまま」と言われ、不登校も多かった。教室で給食を食べられない生徒を『教室以外で給食を食べさせないルールがあるから』と、別室で食べさせることなく午後の授業を受けさせたり、「別室でテストを受けたい」と言つた不登校の生徒を認めず、欠席させたりした。教師の言うことを聞かなければ親を呼ぶ、それでもダメなら警察……そういうことが会議の中で話し合われたこともある。ブラック校則やゼロ・トレランスの言葉を聞いたとき、「ああ正にそれだ」と感じた。

そんな学校が昨年頃から少しずつ変わってきた。今は学校全体で生徒に寄り添うことを大事にしている。「保健室登校は認めない」「保健室利用は1時間まで」と言われていたが、最近は生徒の実態にに応じて柔軟になってきた。保健室で生徒から相談を受けたことも、今は安心してありのままを担任に伝えることができる。先日も、保健室での会話からいじめに気づき、大事に至る前に指導することができた。

先日、小学校の養護教諭をしている友人から、学校全体の理解が得られず苦しんでいるという話を聞いた。集団が苦手な子、騒がしい環境だと不安定になる子、発達や愛着に問題を抱えている子等が保健室に来ることが多いが、職員から「優しくし過ぎるから保健室に行きたがる」「保健室は本当に具合が悪い人が行く場所」「子どもが保健室で楽しそうに笑っている。具合が悪くないなら教室に戻して」等のことを言われるとのこと。生じているのは『養護教諭が子どもを甘やかしているから我がままになる』『養護教諭が子どもを保健室におきたがっている』という誤解だ。

養護教諭は決して子どもを保健室だけで抱えようと思っていない。ただ無理矢理教室に戻しても、前の状態に戻ったり、もっと悪化したりする場合があることを危惧している。本人の気持ちを見無視して強引に事を急いだら、逆に大人を信用できなくなり、学校に来ることすらできなくなるかも知れない。大事なのは安心感である。安心させ、信頼が得られたら少しずつ背中を押していく。その子の調子に合わせ、微妙なさじ加減で……。

集団からこぼれ、SOSを出している子どもに安心感を与え、心の充電をさせて教室に戻す。そういう役割を担い、子どもに向き合っている養護教諭の理解が得られないのは残念でならない。学校の中で共通理解を持つために、どうしたら良いのかが課題だ。

仙台市教委は不登校対策委員会において、各校に別室を設け、担当教員や相談員を配置するという提言案をまとめた。不登校が多い県、市として対策が遅過ぎた感もあるが、前進と捉えたい。しかし担当者が、不登校や発達障害の生徒に寄り添える資質を持っていないければ、子どもにとって安心できる居場所にはなり得ないだろう。別室も、保健室も、傷付いた子どもにとっては最後の砦である。子どもが出したサインを受け止め、向き合える場所、人でありたい。別室と保健室が連携し、同じ目線で子どもを見つめて、安心できる学校を作っていく核になることを期待している。



ルールについて少し思うことがある。

今、本校の生徒達は明るくのびのびとしているが、一方で規律が乱れ、騒がしい状態も多くなってきた。「やはり厳しくしなければ」と言う教師もいて、以前のように力で抑える状態に戻ってしまわないか心配している。

ブランク校則には反対だが、みんなが安心して過ごすためのルールが必要であることは言うまでもない。ルールが蔑ろにされれば、安心できる環境が壊れていき、学校全体が落ち着かなくなっていくだろう。本校の場合は、一部の生徒への合理的配慮に対し、周りの生徒達（その生徒達もそれなりの問題を抱えている）が「なぜあいつだけが許されて俺たちはダメなのか？」と同調して行った結果のように思う。周りの生徒がサインを出し始めたとき、生徒の話に耳を傾け、向き合い、信頼関係を作ることや、生徒一人一人の課題を見極めること、なぜその生徒にその配慮が必要なのかをきちんと説明することが必要だったと思う。しかし私たち教師は、配慮の必要な生徒への対応に追われ、周りの生徒が出していたサインを見逃していた可能性がある。または『些細なこと』と安易に捉えてしまったのかもしれない。合理的配慮と思つてやつてきた対応が、本当に合理的配慮になり得ていたか、配慮の仕方が間違っていないかたかにしても、一度振り返る必要があると思う。

そうせざるを得なかった心情に寄り添いつつも、悪い行動は止める。諦めず、見捨てず、「あなたを見てるよ」「大切に思っているよ」「あなたの成長を応援しているよ」というメッセージを伝えながら……。

力で押さえないということは、力で押さえること以上の、よじ丁寧な関わりが必要なのだ、改めて学ばされている。

（仙台・中学校養護教諭）

教職員評価と賃金

宮城の現状と課題

笹川 聡

2014年、地方公務員法が改正され、いよいよ宮城県でも評価と賃金のリンクが求められました。今まで、「教職員の資質向上」と「学校の活性化」をねらいとして導入されてきた「教職員評価制度」が、賃金と結びつく形で「公立学校人事評価制度」（※1）として、1年間の施行へて、2018年4月から本格的に導入されました（※2）。

教職員に対する評価とはどうあるべきでしょうか。そもそも教育における評価とは、教育という営み（協力・共同）の本質に即したものでなくてはなりません。評価方法において大切なことは、管理職を含めた他の教職員や子ども、保護者、地域など、それぞれが多角的な方向から行うことです。そうすることで、客観性も保たれます。しかし、本格導入された「公立学校人事評価制度」はそうなってはいません。「評価者」と「被評価者」という一方的な関係で決めつけられることになっています。

教職員評価のあり方にかかわっては、あるべきかどうか意見の分かれるところもありますが、公平性・透明性が担保されていれば、導入は仕方がない側面があったのかもしれない。しかし、賃金と結びつけることは絶対にあつてはならないことだと今でも考えています。背景には、初任者研修を導入して以来、一貫して進められてきた教職員の管理統制のねらいが透けて見えるからです。給与や昇給、人事異動・昇進の処遇等、「こぼり」

として教職員が働かせられるとすれば、教職員の協力・共同が阻害され、教育活動が困難となるのは明らかです。

先日、宮教組(※3)の電話が鳴りました。内容は、「自己評価よりも大きく最終評価を下げられた。これは賃金にも関係するのか。」というものでした。事情をよく聞くと、そのまま賃金に直接関わるケースではありませんでしたが、校長の評価に納得がいかず、ましてや賃金がそれで決まるとなれば、当然の不满であるように思えました。校長としてみれば、もつとまわりの仕事も手伝ってほしいという思いだったのかもしれないが、紙面で評価結果が手渡され、しかも短時間の面談では、その思いは十分に伝わったとは言えません。また、ある組合員からこんな声を聞きました。「最近、周りの教員が目についた仕事を優先しているのが気になる。やたらと共通理解・共通での対応が求められ、嫌になる。同じやり方を強要され、職場で同調圧力を感じる。もう少し自由に教育実践に取り組みさせてほしい。」という内容だった。今後、ますますこのような状況は増えてくるであろう。

宮教組では、評価と賃金のリンクは「百害あって一利なし」の制度であるとして、計3回の交渉(※4)を持ちました。その交渉の中で「賃金への反映は、誰かを下げ、誰かを上げるものではない」「地道に努力している教職員は、個々に即して評価できる制度にすることが大事である」「目立たなくても地道に努力している教職員を正當に評価し、成績率に反映する」という回答を引き出し、確認しました。どの回答も管理職が恣意的に評価することがないように求めたものです。また、数値目標を設定することは義務ではないことも確認しています。子どもの成績や態度・行動に関する達成率によって教職員の賃金に影響がでるとしたら、子どもたちの学校生活を教職員が無理強いする可能性も否定できません。このことから、宮教組は一

貫して目標のあり方について追及してきました。交渉の中で「数値目標を必ず入れるとは考えておらず、現場においては(数値目標が)なじまない場合もあり得る」と回答しています。これは、交渉の中で築いた貴重な到達点であると思っています。この回答を学校現場で活用していくことが求められています。

しかし、この評価制度は、教育にとつて一番大事な教職員同士の同僚性を奪い、教育を困難にする可能性を秘めています。先行実施されている他の都道府県では、「評価を恐れるあまり生徒の問題行動や保護者のトラブルを隠し、深刻になってから表面化した。」「校長が一人で目標を示し、職員に実行を求めることが多くなった。」「校長が『普段から私に仕事のアピールして下さい』と言った。」「行き過ぎた自己目標設定を要求する管理職の指導で長時間労働につながった。」などの問題が起っています。

宮教組は、評価と賃金がリンクした「公立学校人事評価制度」の廃止を求めています。廃止しないのであれば、当面、できる限り賃金に差がつかない制度となるよう、運用面での改善を求め、交渉を強化しているところです。

学校は、教職員が手を取り合って、互いに実践を磨き、教育観をすり合わせる中で、感性が磨かれる場所であってはなりません。この忙しい職場の中で、管理職のご機嫌を伺うような仕事ではなく、「子どもと学ぶことが楽しくてたまらない!」という、本来のみずみずしい感性を取り戻せるような学校でありたいと思います。そのためにも、互いに手をつなぎ、本来の教育とは、どうあるべきかをともに考えていきましょう。

※1 交渉の時点では「新教職員評価制度」という名称だった。本格実施にあたりこの名称が使われた。

※2 仙台市においては、政令市への権限移譲の交渉が優先されたため、現段階で交渉中である。

※3 宮城県教職員組合の略称。

※4 県教委側は、管理運営事項として最後まで交渉とは認めず、話し合い・意見を聞く場として取り扱った。

(岩出山小)

学力向上のための 宿題をとらうけれど……

橋本 由美子

孫の明は小学5年生。勉強は好きな方ではないが、先生に言われたことはまじめに取り組む普通の男の子。算数と理科が好きだけど国語は苦手なんだそうだ。

去年の4月、5年生になったばかりの明にとって、毎日出される宿題は、これまで体験したことのない難関の連続だった。量も多いが何より要求水準の高さに対応できずに面食らっていた。宿題は平日の月々金「漢字練習ノート1ページ」「算数プリント2〜3枚」「自主学習ノート1ページ」。土日も宿題はある。市教委作成の「いっしょにドリル」と「算数スキル」と「作文」だ。6時間の授業を終えて家に帰ると、もうくたくた状態である。夕飯を食べ終わると、宿題に取りかかる。食休みも家族の団欒もない。宿題優先だ。

明にとって「自主学習」は相当な負担だった。「何しよう」「どう書こう」と考えているうちに時間だけが経っていく。「自主学習」でありながら、ノート1ページに書くことが強制されているので、ノートにまとめる力も要求される。4月、5月は母親に助けられて何とかまとめていたが、だんだん援助を拒むよ

うになった。成長の証ではあるが、余計に時間がかかり、就寝が遅くなってしまふこともたびたびである。

7月頃、自主学習ノートを開いたまま、考え込んだり、本箱の前に立って何冊かの図鑑を開いたり閉じたりしていた明。30分くらいたつても書くことが決まらないようだ。要領よく漢字とか計算とかでノート1ページを埋めれば良いのと思いつつ、明の真剣な後ろ姿に「ハッ」と思った。そして聞いてみた。「明は、先生にはめてもらいたいの？」と。「うん、そう。」の返事。的中だった。「○○先生、こんなにまでがんばらないと褒めていただけなのですか？」明のあまりの健気さに胸が痛んだ。

今、家庭教育の大切さについて語られることはほとんどなくなった。代わって「宿題」や「自主学習」が家庭の中で優先され陣取ってはいないか。大人たちは、それに安心してしまいか。

仙台市は、毎年4月、12年間にわたって「標準学力検査」を実施している。市民には明らかにしていないが、「下位層」に置かれている子どもたちが減るところか、

増えているのが現状である。(例えば小6算数下位層2010年20・5%↓2018年41・0%2倍である)7年前頃からそれに歯止めをかけようと仙台市が打ち出した施策は、何と「家庭での学習の充実」と「教員の指導改善」である。子どもと家庭と教員に負担を押しつけて切り抜けようと、とんでもない政策を進めてきた。そのことが、教員の多忙を増大し、過大な宿題で子どもたちを縛り、教育を歪めている。悪循環である。

子どもたちの「わかりたい」の願いに向きあい、どの子も、



先生も笑顔輝く学校にするために、教員の増員を急がなければならぬ。

(仙台の子どもと教育をともに考える市民の会 代表運営委員)

親から見た学校の姿

松田悦子

今年、二人の娘が高校と中学校をそれぞれ卒業しました。私は、新日本婦人の会の会員として子育てや今の学校教育について学習してきました。そして他団体のみなさんと、学校の先生の現状や日本の教育の問題などの話を聞いて、自分の子どもを通して感じていることなど話をする機会がありました。現場の先生がいかに大変か、思い描いている授業やクラス作りができない、教育委員会などに提出する報告書の作業に追われ子ども達が置き去りになっている、その他たくさん大変な現状を聞き本当に驚きました。以前娘が話していました。「先生方はいつも速足で歩いていて。急用でないと話かけられない」と言うのです。子どもたちはいつでも「先生、あのね……」と不安な気持ちや悩んでいること聞いてほしいと思っっているでしょう。勉強で分からないところがあったら、聞きに行きたいでしょう。本来であればそんな時間も子どもたちに保障されなければならぬと思います。私は小中学校で娘二人を担任してくだされた、のべ18名の先生方に家庭訪問や面談のとき「35人学級は必要ですか?」「学力テストは必要ですか?」と質問しました。18名の先生方、全員が「35人学級は必要」「学力テストはいらない」と答えました。そして「我々が教育委員会に訴え

るよりも、保護者の皆さんの声が必要です」とおっしゃった先生もいました。学力テストは4月の大切なクラス作り時期に、貴重な1日がテストで終わってしまいます。4月に受けたテストが返ってくるのは夏休み直前です。三者面談で結果を分析してくださる先生もいれば、「これは参考程度で良いと思います」と全く触れない先生もいました。分析と言っても「読解力が平均を下回っています」「得意な教科と苦手な教科の差が大きいので、苦手な教科を伸ばせば……」など、コンピューターではじき出された結果を元にお話していただきましたが、具体的に何をすれば良いの?という疑問だけが残りました。テストをしたからといって学力が伸びるのでしょうか。学力テストに税金という大金をかけるよりも、先生を増やして子どもがキラと目を輝かせて「分かるって楽しい」「もつと知りたい」と思えるような授業にしなければ、全体の底上げにはならないと思います。もつと先生方に時間をください。子どもたちが「分かった」と感じられる授業にするための教材研究の時間、つまずいている子に丁寧に教える時間、家庭状況や心に不安を抱えている子どもたちに寄り添う時間、先生自身も心身を休める時間、家庭のために使う時間、いくらでも時間が必要です。35人以下学級にして先生の数を増やすことは、すべて子どもたちの心と体の成長と学力向上につながると思うのです。

そして先生の数は足りていないという現状です。娘の通っていた中学校では、美術と音楽の先生が非常勤の先生です。毎日学校に来るわけではありません。当然部活の顧問は持てません。昨年の中総体で毎年野球部の応援に行く吹奏楽部と文化部の生徒が、引率の先生がいらないという理由で応援に行けません



でした。先生方もできる限り応援に行ける方法はないかと話し合ってくださいましたが、結局生徒たちは応援に行くことができず中総体の3日間は自宅待機となりました。子ども達の安全面を考えれば仕方ない決断だったと思います。運動部の子たちは結果に関わらず達成感や苦い思い出でも何か残るものがあるでしょう。吹奏楽部や文化部の子ども達は3日間家で過ごしたのです。中総体の思い出がありません。野球部の生徒も学校応援がないままブレイしました。自分たちでバスや電車に乗って野球場まで行く、精一杯応援する、良いプレーや点数が入れば仲間と喜びあう、対戦校のファイナルプレーにも拍手を送る。会場でのマナーやトラブルにならないように言動に気を付けるなど現場でないと学べないことを学ぶ機会が奪われてしまいました。しかし、引率できる先生さえいればこの問題は回避できたと思っています。

4月から育児休暇が終わり、現場に復帰する先生がいます。その先生はとても不安な気持ちでいます。子どもの体調不良などで休めるだろうか、保育園のお迎えの時間があるため他の先生よりも早く帰ると言えるだろうか。休んでいる間に現場はどうなっているのか、英語や道徳はどのように授業をしているのかなど、「また学校で子ども達と過ごせる」という喜びや期待より、不安なことの方が大きいと話しています。実際に子どもたちと接している先生がこんな気持ちで良いのか、先生方をこんな気持ちにさせてしまっている現状が問題だと思えます。子どもや先生方を縛り、管理する教育現場ではなくみんなが楽しむのびのびと過ごせる学校、先生方も自分の理想とする授業やクラス作りが自由にできる学校になるよう、私自身も周りに現状を伝えて運動していかねければと思っています。

(仙台・青葉区市民)

授業とスタンダード

田中和子

フレッシュ研修の時に、指導教官以外に先輩教員にも授業について指導を受けるということがありました。国語の物語文を扱ったときに、単元を通したねらいは「人物の思いが伝わるように工夫して音読する」だったため、物語をより深く読ませたいという思いから、言葉の意味を調べさせ、その上で文章を考えるところという授業を行いました。また、その授業を行う際には、「スタンダード」な授業でよくあるような授業のめあて（青線で囲む）を立てたり、それに対応するまとめ（赤線で囲む）を行ったりしています。

授業の後、その先輩教員には「あなたの授業は、内容以前に型ができていない。」と指導されました。指導書にあるように授業の初めにその授業でのめあてを書いて青線で囲み、それに対応する形で最後のまとめとして赤線で囲むようにとのことでした。加えて、「あなたの授業は古いやり方です。今は、物語の太枠を捉えて構造を把握させるのです。」と、指導書の内容をよく読むように指導されました。フレッシュ研修中だったこともあり、その後は指導書を参考に、めあてやまとめを線で囲むようにしたり、物語の構成などに目を向けさせるようにしたりして授業を進めています。



した。確かに、めあてやまとめを全体で確認することは、子どもによつては安心することもあるようです。しかしながら、授業によつては、めあてを提示することで、おもしろ味のない授業になつてしまつたり、全体でのまとめが必要なのではないかと感じたりする授業もあつたように思います。また、物語の構成を知ることが必要ではありませんが、それだけでなく、一つひとつ丁寧に読み取ること主人公の気持ちを感じ取り、物語のおもしろさを知ることができるのではないかなと感じています。

(仙台・小学校)

みんなが幸せになれる 教育と社会をつくるために

本田 伊克

いつたい、子どもたちをどこへ連れていこうというのか？

アベノミクス成長戦略のキーワードとして掲げられている「Society (ソサエティ) 5.0」なるものは、狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会に続く、目指すべき新たな社会なのだそう。Society 5.0は、新自由主義的な教育改革の方向性を提言する文部科学省の文書のなかでも、学校教育が子どもを送り出すべき社会像と関連付けるかたちで用いられている (Society 5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会・新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース「Society 5.0に向けた人材育成」社会が変わる、学びが変わる」2018年6月5日)。

だが、そもそもこのキーワードにどれだけの内実があるのかさえ怪しい。野村康秀氏によれば、第5期科学技術基本計画(2016年6月15日閣議決定)の段階では、実現すべき未来社会は「超スマート社会」であり、Society 5.0はそれを実現するための手段とされていた。超スマート社会とは、「ICTを最大限に活用し、サイバー空間とフィジカル空間(現実世界)とを融合させた取組により、人々に豊かさをもたらす」未来社会の姿であり、「その実現に向けた一連の取組を更に深化させつつ『Society 5.0』として強力に推進し、世界に先駆けて超スマート社会を実現していく」とされていた。

だが、その後あっさりという意味のすり替えが起こり、2018年6月15日に閣議決定された「統合イノベーション戦略」では、「未来社会としての『超スマート社会』 Society 5.0』を実現することを掲げた」として両者は等号で結ばれる。

そもそも超スマート社会がいかなる社会像を示してあるのかよくわからない。社会の様々なニーズへの対応、あらゆる人々に豊かさをもたらす社会というニュアンスは感じられるが、経済格差や情報格差を是正しようという方向性は感じられない(野村康秀「Society 5.0—アベノミクス成長戦略のキーワード—is、なぜ胡散臭く受け止められるのか?」日本科学者会議編『日本の科学者』2019年3月号)。

Society 5.0に向けて、「公正に個別最適化された学び」を実現する多様な学習の機会と場の提供が要請される。だが、これは日本の公教育の破壊を進め、市場(サーヴィス)化を通じた教育の機会格差を正当化するものだろう。

鈴木大裕氏によれば、2017年、2018年の学習指導要領改訂によつて、何を学ぶのか、何を教えるのかに関わるカリキュラムの基準は、パフォーマンス(学習到達度)の基準に転換された。教師の指導力は、点数を上げる能力に切り縮められ

る。数値による監視、教育的に大事ではないが測定しやすいものを教える効率に特化した業績主義、授業のマニュアル化の進行によって、教師の非常勤化、教育のアウトソーシング化が進んでいく(鈴木大裕「日本の教育はどこに向かっているのか」みやぎ教育のつどい講演から)、みやぎ教育文化研究センター『センターつうしん』第93号)。そうなれば、教師が保護者や地域と共同しながら子どもの育ちに学校生活全般を通して深く深く関わっていくという、日本の教育が世界に誇るべきよさも失われてしまうであろう。

そして、経済先進国のなかで日本ほど国が公教育に金をかけないところはない。この傾向は近年になって一層顕著である。

2000年代を通して、地方裁量の「少人数学級制」などによる増学級があり、教職員の若干の増があるにもかかわらず、教職員給与費は国レベルでも都道府県レベルでも大幅削減され続けている(山崎洋介『学校ブラック化』の背景にあるマンパワー政策」、教育科学研究会『教育』2018年7月号)。さらに、宮城県は2011年のデータでみると、国が定める教職員標準定数を教職員実数(自治体により実際に任用された教職員数)が下回っている都道府県の一つでもある(山崎洋介・ゆとりある教育を求め全国の教育条件を調べる会『いま学校に必要なのは人と予算』新日本出版社、2017年)。

このままでは、教師という仕事に若い人が魅力を感じなくなってしまう。筆者は教員養成系大学に勤務しているが、学生たちのなかにも、教員の仕事の「ブラック」さを感じ、教職になれが進む兆候がみられる。

教師のやりがい、魅力って何なのか?教師がもっている専門性としてどんなことがこの社会で大切にされなければいけないのか?

「センターつうしん」に寄せられた教師たちの実践の記録を読む

むと、そこには子どもの育ちへの願いや、子どもとともに生き、新しい社会を思い描き、育ち合おうとする気持ちが伝わってくる。学校・学級を信頼と安心が息づく場に、そこで子どもたちが思い切りいろいろなことにチャレンジして、力をつけて、それを喜び合いたいと願う教師の姿もみえる。そして、そういうことのために、どんなに忙しいなかにあっても、日々の学びも、教材がしも、ネタの仕入れも怠らない教師たち。

でも、単純に教師の献身性を強調するのはちよつと違うと思う。みんな苦しい中でも、子どものために何ができるかを考えながら頑張っている先生がいることが励みだよね、もつと頑張ってほしいよねっていうだけなのも違うなあ。

教師が教師らしい仕事をするためにも、ときに「何か違うな?ちよつと待て」と立ち止まり、子どもにとつての「幸せ」のかたちを探しながら仕事をできるようにするために、もう少し予算と人は増やそうよ。教育って仕事は経済的効率に還元できないし、そんなふうにしただけ教育という営みを見れなくなったら国も立ち行かなくなるってことを考えようよ。みんなが幸せになれる社会なら、いずれみんなが不幸せになることをわかってよ。

子どもが幸せになるための仕事、そんな仕事を教師が幸せにできることは、わたしたちみんなが幸せになることだ。

(宮城教育大学)



大田堯・中村桂子

『百歳の遺言 いのちから「教育」を考える』

本書は百歳の大田堯さんが、中村桂子さんとの対談と、その後の往復書簡をまとめたものである。そしてその年末、101歳を目前に、惜しまれるながら他界された大田堯さんの文字通り最後の著書(遺言)となりました。

* * *

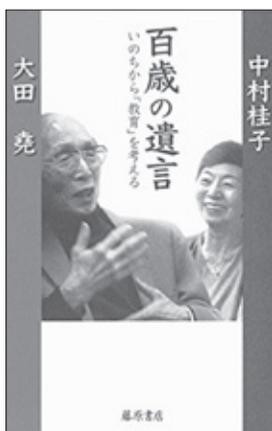
大田堯さんと「みやぎ教育文化研究センター」の関わりは、センター設立から始まります。1994年2月に当センターの設立総会が開かれ、その時の記念講演が大田堯さん。

『『これからの子育て・教育に問われていること』～子どもの人権と地球時代の教育にかかわって』と題した講演でした。定員200名の会場に300名を越える参加でロビーまであふれる立ち見となった参加者の熱気と明るい表情に包まれた講演は、「ヒトが二足歩行をはじめたのは、その気になったからだ」という局面で最高潮に達したのを思い出します。その後も2005年と2011年の2度、映画と講演のつどいを開催し、映画「こんばんは」「かすかな光へ」をそれぞれ上映し「鈍行列車と教育基本法」「いま、伝えたいこと」で大田さんのお話を聞くことができました。

一方、本書の対談相手である中村桂子さんにも、2016年の新春講演会と2017年の高校生公開授業で二度来仙していただき、大変お世話になりました。

* * *

このようなお二人による時代の最先端の意見交換は、一言一句、余すところなく胸に響くものがあります。20世紀の戦渦をくぐりながら激動の時代を過ごしてきた両者が、今の日本社会を問い直す視点は鋭く、厳しいものがあります。それでいて、澄み切ったみずみずしい対話は、「教育」「環境」「社会」について、



やわらかく共鳴しながら進んでいきます。

* * *

私の古いノートに1987年の教科書問題を考える会での大田さんの講演メモがあります。当時、臨教審が「人間回復」を叫んでいる中、個性重視についての話の中で、人間らしく発達するとはどういうことかと問いながら、遺伝や環境という運命とは違う、選ぶ力・分別する力で発達すると結び、臨教審のいう

「人間回復」を批判しました。また「氷が溶けたら何になる」という新聞の投書を引用しながら、『問いと答えの間』を問う」という、本当の教育改革の試みを提示していただきました。

ちなみに投書は、学校の帰り道に泥のついた氷を見つけた子どもが家に持ち帰った時の、母子の会話。予想されるのは「汚れるから捨ててきなさい。」「溶けたら水になるでしょう。」「しかし、この母は「氷が溶けると春になるね。」と見事な対応をしている話です。

* * *

いずれも『ひとなる』の哲学的な研究の辿った道なのでしょう。中村桂子さんが、あとがきの中で、「ひとなる」に対する言葉が「ひとづくり」であるとして、効率よい労働に従事する人材獲得を目的とする政府の「人づくり革命」に、違和感を覚えると述べています。

もう直接お話を聞くことができなくなった大田堯さんが残された初めての『自撰集成』(全5巻)から学び続けることが、「ひとなる」ために、今、私たちにできることだと思います。

ここに大田堯さんへの哀悼の意を表し、心よりご冥福をお祈りいたします。

(事務局 菅井 仁)

おすすめ
BOOK

今日の子ども・学校と

「いのちの教育」

を考える

数見 隆生

1. 今日の子どものいのちをめぐって 問題状況

今日の子どもや青少年をめぐる問題で深刻なのは、「いのち」に関わる課題が多発していることである。ここ数年前は青少年間での痛ましい殺傷事件が問題視されていたが、最近では子ども間でのいじめによる自死問題や最も庇護されるべき親からの虐待死問題、さらには教員からの体罰や「指導死」などが問題視されている。また、学校管理下での痛ましい災害死や事故死なども含め、最も安全であるべき学校でのいのちに関わる問題の発生は極めて深刻な事態といわなければならない。しかも、そうした死亡は氷山の一角である。例えば、昨年1年間に警察から児童相談所への児童虐待通告件数は8万人を超え、この10年で13倍に増えている（2月報道）。死までには至らない青少年の自傷的行為も多数発生しており、今日の子どもの生きづらさの現実とその背景

は極めて由々しき事態と言わざるを得ない。このような現実の広がりは、地方議会や国会の議論を動かす事態にまで至っている。しかし、メディアを通じて聞こえてくる議論は、「いじめ防止対策推進法や防止条例」とか「虐待防止法の整備」「親の体罰禁止の法制化」等といった取り締まりや対策、法規制の文言ばかりである。そして、そうした行政による管理的な対処施策は、学校現場に降ろされてくると「実態調査」や「子どもへの取材やチェック」などの監視的業務となり、教員本来の「子どもを育む仕事」の時間を奪う一層の多忙化を誘発している。今日の子ども間でのいじめ問題は、学校を超えた背景のもとで生じている面があるといえ、学校本来の役割は子どもの人格（自立）と関係性（共生力）を育み、いじめなど発生しない人間形成と学校づくりを追求する場であるのに、その本業の努力や模索がほとんど聞こえてこないのはどうしてなのか。学校が本来の教育、創造的な取り組みができない、しにくい状況になっている問題をこそ語り合える雰囲気を広げなければならぬのではないか。

2. 学校教育の本来的役割と その構造を問う

昨年100歳で亡くなった教育学者の田堯氏は、今から50年余りに、教育の本质を探る一つの手がかりとして、教育の語源に触れ「おしふ」は「愛（オ）しむ」に

通じ、「そだつ」は「巣たつる」より移り、「養む」は「羽裏（ハクク）む」に由来することを述べている。つまり、教育とは子どもへの命・生存を心底愛する気持ちに根差しながら、人間として一人前に巣立てていく営みであり、養護は親鳥がヒナ鳥を大きな羽根で温かく包み、厳しい環境や危害から守りつつ健やかな成長を促す様を意味している、と論じたのである（雑誌『教育』1966・9月号）。当時、こうした教育の根源を問う直したのは、高度経済成長後の急激な生活・環境の変貌と受験教育中心の学校への歪みが子どもの命や心身に様々な負の問題現象をもたらしていたからだった。

その後約半世紀経った今、子どもと学校の問題はある面で一層深刻になっていると言えよう。学校でのいじめ問題で自死に至るとか、人間としての成長・発達を育むべき学校に「行けない」子が何万人もいる事態が何年も続いていること自体異常と言わざるを得ない。そして、この状況に慣れしてしまい「やむを得ない」という感覚が今日の日本社会に流布しているとすれば、それこそ深刻な事態であろう。学校という人間を育てる本来的役割を見失い、「学力テスト」で子どもと学校を評価し、格差つけをし、スタンダード方式で教育を画一化する体制の矛盾を教育関係者はもちろん保護者も含めて再考すべきだろう。個性的な子どもを育てるには「創造的教育」は不可欠であり、その保障は教員集団と学校の自由と余裕に

よって可能だと言える。

発達障害のある子ども通常学校で一緒に過ごすことが、社会に出てからの共生関係を築いていく上で重要だとするインクルーシブ教育の考え方は、正論であり意義ある教育改革だったが、他方でそれと相反する競争主義・排他主義的現実が学校にあり、教育現場に混乱と歪みをもたらしていると感じる。この矛盾をなくし、安心・安全と自立・共生を育む学校をどう創造しようかが重要でないか。学校を樹木に例えれば、いのちの基である根っ子（安心、愛着、仲間）をしつかり整え、幹にあたる発達（自立と共生）の活動を保障することで、その上に実が膨らみ、花が咲く真の学力（人間らしく生きていく諸能力）の形成が可能と考えるのである。

3. 徳育的に広がる

「いのちの教育」への気がかり

前述したような子どものいのちに関わる危機的現実があり、それへの対処主義的施策や取り組みに陥っている状況のもと、他方で一面的に徳育的な「いのちの教育」で対応しようとする動向があるのも気がかりである。それは、2018年度から導入された教科「道徳」の推進とも相まって、国や地方の教育行政機関はもとより一部の教育研究者、民間組織人、助産師等の職能人などの独自の動きも関与して、その質的吟味なしに「いのちの教育」が一面的に広がっている状況に不安を感じるからである。

その動向は、「生命尊重」と「自尊感情・自己肯定感」といった心情育成を主眼にした提起や取り組みであり、生命尊重の中心理念は、「神秘性」「一回性や有限性」「連続性」であり、「父母から授かった命」「祖先から受け継いだ命」「生かされている存在」であり、そのことへの「感謝」や「畏敬の念」を育むことが狙いになっている。また、「命を重く実感的に受け止める」ことで自尊や自己肯定の心性が育つとも考えているのである。

教科道徳での「いのちに関わる内容」は全体の4分の1を占めており、動植物の命の尊重、人間の生命誕生とつながり、かけがえない命の伝説、難病者や災害体験者の命の手記、等を教材化している。ネット情報でも、各地の教育行政機関による「いのちの教育プログラム」や指導略案を様々に提示している。比較的多く見られるのは、「いのちの誕生」を感動的に学ばせようとする教材である。かつて養護教諭などが性教育の一つとして行っていたが、最近「誕生学協会」なる民間組織が講師資格認定をして学校に入り込み、授かった命を感動的に学ばせる「いのちの教育」を広げたりしている。他方、こうした取り組みに批判的な見解もネット上で展開されている。それは、精神科医や小児科医などによる批判で、今日、親から虐待を受けたり、育児放棄やネグレクトを受けている子、愛着障害を被っている子、児童施設や里親の庇護のもとに生存している子も多く、一方的に誕生をハッピーに語り親への感謝を押し付けていいの

か、というものである。命や自分を大切に思えない育ちの子を含む学校でのそうした指導は、一層その子らの心の傷を広げると指摘する。「2分の1成人式」といった取り組みへの批判も同質の指摘である。

このように「いのちの教育」は様々に錯綜しながら広がっているが、私の気がかりは、戦前の修身に見られたような宗教的・徳育的生命観も十分吟味されることなく「いのち」という抽象概念をひっつけて現在の課題への対応に心情形成として入り込んでくることへの警戒である。同時にそれは、今日の教育現実のあり方を問い直すことなく、無関係に広がっていることへの懸念でもある。教員という職種は、「いのちの教育」「心の教育」に共感しやすい傾向があるが、命も心もその実体は「からだ」である。戦前、教え子を戦地に送り出し辛い経験と反省をした教師たちは、戦後の教育実践で人權の立場から「いのちとからだを大事にする子ども」を教育目標に掲げた（『村の一年生』土田茂範、等）。私自身そうした教育を小学校時代に受けた。担任教師はクラスメートが3日も病気で怪我等で休むと皆に励ましの手紙を書かせ、その子の近所の子どもに届けさせた。私はこうした「からだ」の事実こそ着目し、憲法に保障する生存権を基底にその慈しみや素晴らしさ、大切さを共鳴し合う関係性を育てるべきだし、そういう学校づくりと関わって「いのち」が教育に位置づかねばならないのだと思う。

（センター代表運営委員）

「書きたい。」 だから、書く

小野寺 由美子

「先生。じゆぎよう中は、いえなかつたんだけど、おもいついたことがあって、どうしても、いま、いいたい」

1年2組でスイミーの授業が終わったとき、絵を片付けている私にIが近づいてきて言った。今年1年生とは、算数と道徳の授業で関わった。国語のスイミーの単元は、担任に頼んで受け持たせてもらった。

「あのね。このうみは、たのしい、しあわせなうみだなあって、そうおもう」「わあ、なんてすてき。明日みんなに紹介してもいい。今の言葉忘れたくない。書いて」持っていたメモ用紙を渡すと、「うん」嬉しそうに言った。

今回の授業は、絵本の世界に子どもたちを存分に浸らせ、情景を豊かに描かせたいと考えた。この教材は絵本が出典。教科書では省略されている場面にも作者の強い思いが表されている。絵本を使って、絵も文も丁寧に扱い、子どもたちの興味を大切にしながら読み進めようと学年で話し合った。スイミーの世界に浸らせる授業をどうやったら作れるか。

立てたプランを学習会で検討してもらった。「豊かに想像させるには、知的好奇心を刺激すること」「小野寺さんは、自由に、豊かにと言う割には、このプランは型通りだね」「書くことに向かえない子のことを気にしているのに、進め方はこれでいいのか」全くその通りであった。

これまでの授業の型は取り払おう。

子どもたちから話を引き出し、一人ひとりが読み取ったことを基に、教室のみんなで場面の情景を共有する。書くことよりもイメージを膨らませることを大切にす。授業のプランを練り直した。

自由に発表できるように、机は後ろに下げ、絵がよく見える場所に椅子を持って集まらせ、授業を始めた。

1年2組には、個性的な子がたくさんいる。椅子の背当ての間から足を出して座面に寝てしまうN、文字を書くのは嫌い。教室での勉強は具合が悪くなり、何もかも嫌になってしまうMTはいつもにこにこ、でも発表や文字での表現は苦手。Kは冬休み明け頃から、質問に添った返事ができ、会話を楽しめるようになってきた。Sは、じつとしていられない。うろろう歩いたり、棚の上の上ったり、静かなのは机に伏せて寝ているとき。Rは、授業中、頭を抱え顔を伏せたまま、時には廊下にいることも。嫌になると、自分が好きなことを勝手に始めてしまうYとG。Iは恥ずかしがり屋、プリントを前に「何書けばいいの」と、時間いっぱい悩み、仕上がらないと涙くむ。

絵本を見せて読み始める。「題名と、名前のスイミーが同じだ」Nが床に足を付け膝に手つき絵を見つめ始めた。Mも体を乗り出して気付いたことをたくさん話す。「カラス貝つてなに?」「石の所にいるからブルドーザーなの?」「うなぎつてうつばみたい」他の子たち



も「くらげが、きれいないろ」「かいそうがレースみたい」「あ、赤い魚のきょうだいたちいたんだ。ちよつとちがうかな」「スイミーかつこいい」など、45分の間、絵本を見ながらいろいろな話をした。

「スイミー、くらげ見てる」Kが大発見をする。GとNが「くらげも見るんじゃないかな」と返した。

2時間目、小さな魚の兄弟達と楽しく暮らす場面。文は模造紙に書き、黒板に貼って全員で声を合わせて読む。「ひろいうみ」「たのしくくらす」は、どういふことか。見渡しても海だけ、海底までずつと深い。いろいろな生きもの、岩や砂や珊瑚礁。海の様子を頭に浮かべることができると、スイミー

と赤い魚の兄弟たちの行動や会話を想像し始めた。吹き出しの形をした付箋に、私が聞き取り、書いては絵に貼っていた。Iの言葉は、この日のことだった。

3時間目、付箋を付けた絵を見せ、Iのメモを紹介する。拍手がおこる。「そうだよ、そう思う。」「もつと考えられるよ。」「気持ちがいい海」「美しい海」「賑やかな海」「明るい海」「鮮やかな海」「仲良く暮らす海」。

今日読んでいく文を貼る。「ところがある日」を読む。「いつたい何がおこるの」次の絵と文を出し、読み進める。授業が終わると、Iが「先生、今日も書いていい？紙はある？」とやってき



た。すると、それを見ていた何人かの子どもたちが、「わたしもほしい」「ほくも書きたい」と寄ってきた。Iは、「たのしかった一日がこわい日になった。うみが、スイミーだけたすかかっておそろしいところになった」と書いた。

4時間目、暗い海の底を一人で泳ぐスイミー。昨日書いた子どもたちの文を紹介した。順に読んでいくことで、恐ろしいまぐろに飲み込まれてしまった場面を振り返ることができた。「くらい」「うみのそこ」からイメージしたことを話し合う。一人で泳ぐスイミーについて読み取ったことを付箋に書いて貼っていく。子どもたちが「自分で書いてみたい」と言い出した。書きたい子に渡し、発表させる。書きながら、スイミーの悲しき、寂しき、怖さをもう一度味わったのだろう。教室の音読が変わっていった。

5時間目からは、海のおもしろいものやすばらしいものを見てスイミーが元気を取り戻していく場面だ。Kがまた「スイミーがくらげ見てるんだよ」と得意げに言う。

私も得意になり、以前学習会で教えられた紙人形を出した。絵の前で紙人形のスイミーを動かす。「下からも見える」「上からも見えるよ」「周りをぐるぐると泳いで見る」と、絵本の中のスイミーは、くらげの周りを泳ぎ始めた。

「見たこともないさかなたち、見えない糸でひっぱられてる」魚になって動いてみる。引っぱられているように。

Tが自分も書きたいと付箋を取りに来た。書いたのは、「スゴイ」。授業の終わりに、メモ用紙をもらいに集まる子どもがどんどん増えてきた。Tはこの日、集まりの中にいた。今度は、「スゴイ」と書いてきた。

9時間目、「そして、かぜにゆれる……」

教室のほとんどが「書きたい。」「早く書きたい」「書いていいの」「ぜったい書く」と言い出した。書き上げると、前に来て読み上げては、貼っていく。いそぎんちゃくとスイミーの周りには、子どもたちの付箋でぎやかになった。

次の時間、「そのとき、いわけげにスイミーは見つけた」Tの音読の仕方に力がある。付箋を取ると、「小さい魚たちみつけ」と書いて発表し、貼った。Iのこの日のメモは、「ぼくは、やつぱりおとうとたちといっしょのしゅるいの子とすごしたい。だつたらいい。きみたちがすぎだよ。ぼくはやつぱりいっしょにすごしたほうがいいとおもうよ。ぼくはずっといたいよ」だった。

Sは、変わらずうろうろ、読みには参加していないように見える。黒板の絵を触っていく。何かつぶやいている。「スイミーは、かんがえた。いろいろ、かんがえた。うんと、かんがえた」Nは、「なんか書きたくなってきたんだよね」とメモ用紙を持って行くのだが、書き終えたことはなかった。

11時間目、スイミーが考えた場面の読みが終わると、Nが自分が発表した

ことを書き、「はい」と差し出した。「よくかんがえたらきつとうかぶはず」次の時間、紹介する。「そうなんだよ。これ書いたんだ」と、嬉しそうだ。次は二枚書いた。「先生、読んでね」「あのとき、いまのこれのこたえがおもいつけたらよかった」「スイミーはあたまのかいてんがはやかかったから、大きなさかなをおいだせる」

1年2組の教室からスイミーを読む高い声が響いてくる。壁に貼った文を読んでいるのだろう。教室に入ると、違う方を向いている。「もう、覚えちゃった」自慢げな顔、満足そうな顔が、私を見つめている。

16時間目、最後の時間、Rが言った。「今日は全部音読したんだ。ぼく、国語好きなんだ」

(仙台・小学校)



1月4日 養殖業47歳

初来店の男性2名は、注文したイカ一夜干し「うめえ」とほおぼりながら、何の仕事をしているか分かったのは退席のほんの数分前だった。女川港の海沿いの地区の飯子浜でホタテの養殖をしている。

飯子浜と聞いて以前女川通信に載せた記事を思い出した……震災から2週間くらい経った頃に散髪のボランティアで飯子浜の避難所に向かった時、小雨の降る中、丸太に腰掛け遠く水平線を力なく肩をおろし眺める男たち4人がいた、その背中からは絶望・喪失感を醸し出していたが、海や浜の瓦礫や道具を集め休憩していたようにも見受けられ、そうであれば力強さや希望が見えた……そんな話をしたら「それ俺らですよ！」流されずに残った船外機一艘で、船の道具や流された家の瓦礫を集め、また養殖を始めるようになるまで1年はかかったと。集めた瓦礫を燃やし、缶コーヒーを流し込む、水平線を眺めながら「俺はこの浜で生きていく」と覚悟を決めた瞬間でもあった。種をつけて稚貝を出荷できるようにするまで数年、販売の販路を探し……ほとんどの販路先が被災にあい連絡も途絶えた中、少しずつ立て直してくれた販路先をみつけ今では年収を確保できるようになったと。こんな苦勞を知ればホタテの味も格別、彼らがいるからホタテがある、感謝せずにはいられない。

3月2日 自営業52歳

石巻では未だに他県からの応援者を必要とし復興に関するいろいろを手助けして頂いてい

る。石巻が好きになり大阪から希望して3年間いてくれた青年は、子どもたちの夏休みに石巻に呼んで被災地を廻ったり魚と酒の美味しいお店で家族孝行し、石巻の良さ……地域性・人柄・魚が新鮮などを共感してもらうなどを行っていた。彼の紹介で埼玉からの支援者が2人来店石巻に行ったら「こまち」に行けと聞いて来ました。60歳のやつちゃんと30歳のケンゾーさんは単身で自炊だからコンビ2弁当が多いですねと話す、格安で定食も提供しますよと提案し、そのつもりで来店するが飲まないと言つてられないと飲酒していく、いわばよそ者ならではのストレスが溜まる様子。ケンゾーさんから電話で「びつくりする方をお連れします」と数十分後扉が開いた。「はい、いらっ……えっ……言葉がつまり「えっ……」感極まる声が出てしまった。

震災前、女川に居た頃のママ友2人は、398号線沿いに自宅があり、家を流されたり、家の中に海水や泥水が流れ込み全壊状態で家を失った。被害の無かった友人の大沢地区に身を寄せていると聞いたので、ママ友2家族分の着替えを大きなバック2つに詰め、小雪の降る2キロを歩いて届けた。家に泥水が流れ込んだママ友は、長女18歳とは、地震直後に電話で会話し、飼いたと一緒で逃げるよう避難先を指示したという……夕方職場から避難所に駆けつけるがおらず、みるも無残な自宅に探しに行き、下駄箱・ソファなどびつくり返して探すけどの部屋にもおらず、暗くなり見えないから生きていてと祈りながらこの日は友人宅へ帰る。明朝陽が昇るとともに自宅へ探しに行き、見つけたのは飼いたのみ。見つけるまで毎日自宅の周りを

探しまわる、見つかったと聞いたのは1週間後50メートル離れた所に流されていた。

それ以来、震災をどう乗り越えていこうか、お互い必死で連絡はとれておらず、でもずつと気になり……私の息子の同級生で小さいころから生まれ月も一緒だから遊んで、子育てや嫁の相談をし仲良くしてもらっていた友達、8年間の娘さんを亡くした苦悩は計り知れないだろうと、一言口を開けば涙が溢れ出る、だからなおのことLINEは知っていても連絡を取らずにいた。その彼女の顔が見えた途端涙がジワー、他にもお客さんがいるからこらえる、連れて来てくれたケンゾーさんにどんな繋がり？と聞くと、前のお店で隣の席でこまちを知つてると言うので連れて来ましたと。「会いたかったのありがとう」の私の言葉に彼女も涙し、その瞬間8年間の空間がうまつた気がした。店内では震災の話はせず、8年振りのお互いの年を重ねた顔のシワを微笑ましく眺め、会話を聞いていると相変わらずの人間性に懐かしさを覚えやっぱ好きと実感する。「みやちゃんどう？」「楽しくやってるよ、好きでやってるから」。今度はいつ会えるか約束もせず、またねと手を振る。連れて来てくれたやつちゃんとケンゾーさんに震災時の状況を説明すると、本人に聞いていいものか、やっぱり聞かなくて良かったと目をあつくする。2人とも心の痛みが分かる方たちで、そんな方々との出会いと友人と逢わせてくれた縁に感謝する、少し明るい8年目を迎えられそうだ。

(一杯呑みや・こまち店主)

救われたのは、いじめられていたから。山田先生が担任になって、ほっとした。夕張市立第一小学校5年松組でのこと。

小学3年4年の2年間、よい思い出は一つもない。2年までは優しく温かなお母さん先生が担任だった。叱られることはなかった。勉強はしなくても、100点だった。担任は「さとちゃん」と呼んだ。なんの違和感もなかった。私はずっと「いい子」で「さとちゃん」で過ごすことを疑っていなかった。2年生の3月に水疱瘡で休んだ。修了式に出られなかった。そのままおたふく風邪になった。3年生始業式に出られなかった。

クラス替えがあり、教室は木造校舎に。日が当たらず、空き教室が幾つも続く廊下の端だった。恐る恐る教室に入った。同級生にとっては自分の教室だったろう。私は、私の教室と感ぜられなかった。担任は、男性。授業中も煙草を吸っていた。しきりに痰を吐いていた。何かと怒鳴った。チョークを投げつけた。私は「土屋」と呼ばれた。苗字で、呼び捨てで呼ばれるのは初めてだった。返事はきちんとできなかった。身体を固くした2年間だった。

同級生の多くは、野球に熱心だった。

た。私は、仲間に入れず、入ろうともしなかった。休み時間は、似たような一人二人とノートの端に絵を描いていた。将棋をした。野球の大勢が戻ってくると、隠した。ばかにされるに決まっているから。

国語の時間、黒板に漢字を書けと言われたことは忘れない。「弟」という漢字だった。書けない私は黒板に向かい、担任の舌打ちを聞いた。同級生の「土屋、泣くぞ」という声を聞いた。何もできず、話せず、涙

わたしの出会った先生 25

「どやちゃん。小さな青空」

土屋 聡



があふれた。鼻を吸った。「ほら、泣いた」と聞こえた。担任になじられて、席に着いた。忘れない。

気持ちも顔も上げられない。声も出さない。そんな私に、勉強など美に入るはずがない。何もかもできなくなる。自分が嫌いになる。双子の妹が小学校に入学する頃には、親は妹に掛かりきりで、私は何でも自分でしなくてはならなくなった。けれども、できないままだった。

消しゴムを無くしても、親に「買っ

て」と言えなかった。鉛筆の端に付いている消しゴムを工夫して使った。下着を取り換えることを知らなかった。冬に石炭ストーブの近くに寄ると、私の回りはすごい小便の臭いになった。一人で風呂に入っても、洗髪が嫌で、アリバイにちよつと濡らさずだけ。たぐさんのフケが机を白くした。鼻炎がちだだったがティッシュ(ちり紙)は持っておらず、袖でふくから、袖はいつも鼻水でコーティングされていた。席替えをする

とき、隣になる人が快く感じていないことを毎回感じた。

当時の夕張では、炭鉱の閉山が相次いだ。どんどん下請け会社がなくなり、炭鉱会社も縮小した。こそこそと小声で将棋をしていた似たような一人二人は、次々転校していった。無言でちり紙を渡してくれた女の子(名前を忘れない)も、隣の炭鉱町に行ってしまった。何もかもよいことはないように思う日々だった。

5年担任は、山田先生。男性だか

ら、警戒した。また傷付くことを身構えた。クラス替えをしたけれど、友だちはいない。「土屋」を「つちや」と読めない同級生がいた。「どや」と呼んだ。ああ、と思った。ばかにされると予想した。これまでずっと絶望の入り口がいつもいつも口を開けていたから。けれども、私はびつくりして顔を上げた。それは、山田先生が私を「どやちゃん」と呼んだから。あだになりにかねないところを、先生は温かく、みんなの前で救ってくれた。「どやちゃん」と先生

生が呼んで、みんなは沸いた。あだではなく、ニックネームとして肯定された。私は、顔を上げた。ほっとした。少し希望が見えた。小さな青空だった。

私は小学校の教員になった。呼び方、呼ばれ方はとても大切。そう心している。これは、山田先生に救ってもらったから。

そして、振り返る。たぐさんの子どもたちに出会い、たぐさんの子どもたちと過ごしてきたけれど私はどうだろう、と。私は、救っているかな。私は、おとしめていないだろうか。私は、あの少年の気持ちの延長を、歩んでいこう。たった一言で、人は傷付く。たった一言で、人は救われる。

(浦谷第一小)

～心の声に寄り添えたら～

ある雨の朝、相談センターに向かっている、マンションから親子が出てきました。カラフルなレインコートを着た3才ぐらいの男の子とお母さんで、パツと周りが明るくなりました。かわいいな……と微笑ましく思いながら、後ろを歩いていると、ママと楽しいお出掛けのはずの男の子が泣き始めたのです。どうやら、自分も傘を差したかったようです。ママのバッグには、きつとかわいい傘が入っているに違いありません。「今はダメなの。急いでいるから」とお母さん。手をつないでいましたが、男の子は引つ張られるように歩いていて、泣き声も大きくなってきました。私の心の中は『せつかく、したいことが言えたのね。雨の日は嫌にならないでね』『ママ、そんなに急がなくても……。子どもには意味がわからないはず』と、坊やのおばあちゃんのような気持ちになつていました。

信号待ちで一緒になり、坊やに「かわいいね」、お母さんに「雨のお出掛けは大変ね」と声を掛けることしかできませんでしたが、お母さんが「頑張つて歩いて、えらいね」と褒めてあげていたので、ちよつとほつとすると同時に、子育てを頑張っているお母さんを心の中で応援しました。自分も子どもをせかせてしまっていた朝はあったなあ……と、二人を見送りました。

行った時のことです。仙台までの新幹線の利用も学習に組み込まれていました。仙台駅が近づき降りる段になって、席を動きたくない様子……このままでは福島まで行くことになってしまうと、引つ張るようにして、やつとのことで下車させました。スケジュールの学習をしていても、直前の見直しを持たせることに失敗し、泣かせて動かしたのです。子どもは時間の感覚が大人とは違っているし、時間の概念が身につくのは小学生段階特に発達障がいのお子さんにとっては、他のことができていても、時間を理解し行動するのは難しいのです。焦っていると、子どもが見えなくなってしまう……、そんなことを思い出した朝でした。

大人の都合で、楽しかったはずの子どもの気持ちをしぼませてしまうことは、このように日常によくあることかもしれません。自分が大好きな人と出掛けようと外に出た途端に、急がされたらどうでしょう。ちよつと立ち止まって子どもがやりたいことを尊重してあげること、親子にとつての心豊かな優しい時間が生まれるのではないかと思います。年齢を重ねても、母と歩いていて教えられた花の名前は忘れられませんか、ふと懐かしく思い出す過去があるのは幸せなありがたいことです。

子どもの命を守りたい

こんなふうに、ちよつとした場面でも子どもの泣き声が気に掛かるのは、親からの暴力で生まれてわずかの年月で幼い命を落とす痛ましい虐待事件が後を絶たないせいかもしれません。子どもは無条件で愛される存在なのに、毎日恐怖におびえ、亡くなった子どもたち。泣くことしかできない赤ちゃんや、言葉や文字で助けを求めた子どもさえ大人が守れなかったことに、胸が苦しくなります。命が助かっても、暴力を受けた子どもたちの脳が傷つくことがわかってきています。相談センターに毎日のように電話を掛ける青年は、幼いときに両親の怒鳴り合いの中で育ち、自分も叩かれたり、大声で叱責されたりしたことで、今でも急に大きな声で何かを言われると頭痛や腹痛に悩まされています。彼の表現によると頭を石でガンと叩かれたような痛みだということで、それは辛く苦しいことでしょう。好きなことができ、料理が得意で、自信を持って生活しているようでも、時々そのような場面に遭遇すると苦しみ、「何のために生まれてきたの？」と訴えます。

支援学校で出会った健気な子どもたちや明るく支えていたご家族からたくさんのお話を学びました。受け持った中に辛い意味で忘れられない子どもがいます。楽しく会話のできる子でしたが、穏やかに遊んでいたかと思うと、ある時、突然ほうきを手に持ち、振り上げ大声をあげて攻撃してくるのです。すごい力で蹴ってくることもありました。その子の豹変する姿の背景に家族からの暴力が想像されました。誰かにそのようにされなければ学

習しない行動です。落ち着いて生活していくには、かなりの時間を必要とした事例ですが、親にされたことがフラッシュバックすることの恐ろしさをその子から教えられた気がします。

やはり、毎日電話を掛けてくる男性は、家の中に上下関係があり、親が子どもを支配する立場にあることが虐待のはじまりだ……と言います。人に対する恐怖があり、長い年月前に進めずにいる彼は、うつ状態になるきっかけになった、ある学校での失敗を親には言えなかったことを打ち明けてくれました。言葉や力で上から支配してくる親は、いつか勝ちたい相手であり、頼ることなどできない存在だったようです。安心して何でも言える親子関係があれば、傷が小さいうちに癒えていたのではないかと、親に受け止められ、自信を取り戻せていたら、何十年も傷ついたらままだはなっていないか、ではないかと、と想像します。なんとか少しでも心が晴れ、安心して過ごしてほしいと思うのですが、守られた感覚のないまま、どうやって人の中に出ていけばよいのでしょうか。ともに考えようとしていますが、難しさを感じています。

親はなぜ子どもにも暴力を振るうのでしょうか。自分がされたことをぶつけているのでしょうか。社会でひどい扱いを受けているのでしょうか。同じく親の脳も心も傷ついているのかもしれない。西澤哲氏は、『子ども虐待』(2010)の中で、虐待は、子どもの親であることを「乱用」して、自分の欲求

や要求の充足につながる行為をしてしまうことであり、特に虐待を受けて育った親が自分の愛情欲求を優先させてしまう傾向があり、子どもを「乱用」する心理が生じやすいことなどについて分析しています。

今、日本では国連子どもの権利委員会から「子どもの生存及び発達の権利が危険にさらされている」と勧告を受けるほど、社会全体が歪んで、子どもたちにゆとりのない日々を強いている気がします。子どもの権利が尊重され、大人たちが気持ちにも時間にも余裕を持って子どもと接することができたらなら……と願います。

「寄り添う」とは

どこかの総理大臣が「被災地の皆さんに寄り添う」「沖繩に寄り添う」と言いながら、実際の行動が真逆なために、「寄り添う」という言葉が空虚に思われ、同じその言葉を使うことを躊躇してしまいます。本来は、いつもそばにるように話を聴く、横に座って背中をさすって、不安になったり怒ったり嘆いたりする気持ちを受け止めるような感覚で「寄り添う」……私たち相談員の目指すべき共感の姿をあらわす言葉、と思うのですが。

今日一日誰とも話さなかったという孤独を抱える人の電話は何時間にもなり、「こんな毎日を生きたくない」と訴えられると、ともに苦しくなりますが、それでも今日も生きてここに電話を掛けてくれた……誰かに話すことで、少しでも心が軽くなってくれたらと受

け止めています。

相談員として5年を終えようとしていますが、相談してくださる方が長い間抱えている問題を解決する力になれていないと感じるこの多い毎日ですが、それでも、虐待、不適切な親子関係が長い時間にわたって人を苦しめることについて、彼らに代わって、このような機会に具体的に発信することで、少しでも苦しむ子どもを減らしたいと考えます。

子どもたちが大切にされ、安心して幸せに生きていける社会になるように、教育文化研究所センター、「センターつうしん」の読者の皆さんとも、ともに考えていきたいと思っています。

「みやぎ教育相談センター」のご案内

TEL 022-272-4152

相談受付内容

進路・不登校・ひきこもり・いじめ・
家庭生活・教職員の悩みなど。

日曜と休日をのぞき9時から17時

〈土曜：10時から15時〉

ただし夏休みなど長期休業期間は、相談センターも一定期間、休業日があります。

秘密は厳守します。相談は無料です。



おすすめ映画

右に寄ったこの国にも民主化運動は、あった

「タクシー運転手 約束は海を越えて」

「1987 ある闘いの真実」

ゲオの韓流コーナーにきた。もう7泊8日の廉価版になってた「タクシー運転手 約束は海を越えて」を端っこに3枚見つけた。毒蝮三太夫みたいな大きな顔の運転手のおっさん(キム・マソンプ)が、車の窓から身を乗り出して笑っている。運転手は、大金ほしさにドイツ人のカメラマン(ピーター)を乗せて光州に向かう。ピーターの目的は、光州広域市で起きた民主化運動を武力で制圧(光州事件)し、その事実をひた隠しにする軍事政権の実態を世界に報道することだった。そんなことは知らない運転手が、持ち前の明るさと機転で検問を通過し町に入ってしまった。そんなことには知らない多くの市民や学生達が負傷した姿、たった。武装した軍隊の放つ催涙弾の白煙に息もできず、銃撃を受けて逃げ惑う人々。こんなことが本当に起きていたのかと思うシーンが続く。ピーターの素性がばれて私服軍人が追ってくる。狭く入り組んだ道を必死に逃げる運転手とピーター。翌朝になると、運転手はピーターを置いて町を抜け出るのだ……。史実に基づいて作り上げた映画だ。後半は、ピーターを空港まで送り届ける運転手の泥臭い活躍。うん、そうだ、奮闘が描かれる。タクシー運転手仲間の助けに涙し、私服軍人の執拗な捕縛から逃れるサスペンスにドキドキしてほしい。面白くても一級品である。



もう一本の「1987、ある闘いの真実」は、こちらも韓国の民主化運動の真実を描いた作品だ。ソウル大生、パク・ジョンチョルの拷問死を隠蔽しようとする全斗煥(チヨン・ドファン) 軍事政権に立ち向かう市民の記録が生々しく描かれている。近くて遠い国になってきた韓国に親近感を持たせてくれた2作品を見て、きつと、あなたも、あの学生時代を思い出すんじゃないかなあ。

(加藤 修二)

センターの動き

1月

5日 冬の学習会、午前「研究センターの部屋」授業のおもしろさ・難しさ」をもち、関合子さんに少年院での美術の授業報告をしてもらう。

8日 午前、市民の会事務局会議

10日 春日さん、研究センター委託事業化に関わって連絡あり。高校生公開授業、県内高校へ電話が開校。

11日 午後、事務局会議、センター委託事業化やつうしん94号の内容など協議

15日 私教連執行委員会会議、高校生公開授業の協力依頼をする。

16日 3月の「震災のつどい」打ち合わせを宮城組で行う。小牛田農林のS先生から高校生公開授業参加の高校生の連絡あり。中村桂子さん、樋口陽一さんの公開授業参加生徒にチラシを送付。

21日 ゼミナルStudio、スペンサーの教育思想について。

24日 高校生公開授業、受講申し込み生徒に当日の案内要項を発送。午後、みやぎ教育のつどい事務局会議、講師は児美川さんに依頼することが決まる。

25日 午後、事務局会議

26日 「教育」を読む会

27日 「道徳と教育」研究会、光村図書小学校道徳教科書の分析を行う。

29日 第6回震災のつどい打ち合わせ

30日 「センターつうしん94

号」の執筆者について協議

31日 教育会館へ提出していた委託事業化に関わる質問書について会館理事長・専務より回答。市民の会、学力テスト請願書について協議。

2月

2日 GODO教研、里見まり子先生の身体表現の講座に参加。

7日 市民の会、報道各社との記者会見の後、学力検査・生活調査の中止を求める請願を仙台市教育委員会に提出。

8日 午後、事務局会議、会館との委託事業化について報告と協議。運営委員会を早い時期に持つことを確認。事務局会議後に高校生公開授業参加申し込みのフアックスが続々届く。追加準備に追われる。

10日 加藤公明さんの高校生公開授業開催。参加高校生は38名。

12日 午後、仙台市のいじめ防止条例案についての学習会、講師は、宮城大の山岸さん。

15日 埼玉大学の岩川直樹さんに講演の依頼をする。

16日 「教育」を読む会

19日 午前、市民の会会議、仙台市のいじめ条例について協議。小野寺さんの公開授業案内チラシを作成、さっそく学校などへ案内送付。

22日 高校生公開授業の助成を受けている日本教育公務員弘済会宮城支部へ助成金成果報告書提出

25日 ゼミナルStudio、エレン・ケイについて。

26日 午前中、市民の会でいじめ防止条例への要請文の

検討

27日 午後、小野寺さん公開授業(5年「大造じいさんとがん」)の参観・検討会に長町南小学校へ。

3月

1日 午後、事務局会議、引き続き運営委員会。委託事業化について協議。委託化はしない方向で話まともる。

2日 第6回震災のつどい、35名参加。

6日 研究センター委託事業化に対する運営委員会の報告と会館並びに理事への要望書案を作成。

14日 高校生公開授業の仙台市教委名義後援の報告文書を作成・送付。

15日 小森陽一さんの授業参観・交流検討会に行く。

17日 道徳と教育を考える会、学研の小学校道徳教科書について検討。

18日 ゼミナルStudio、デュルゲーの道徳教育論について。

19日 新任教職員向けのセンター紹介案内を印刷・作成

22日 午後、事務局会議、19日の会館理事会上について報告。新任教職員向けのセンター案内をセツトし、教育会館厚生部へ発送依頼する。

23日 「教育」を読む会。

24日 県南地区の教育・子育てシンポジウムで「学力テスト体制」と「学校・授業スタンダード」問題を報告。

27日 ホームページの「授業のための資料室」に、「いじめ関連資料」を新設する。(菅井)